

倉吉緋の維持・発展に向けて

1158055 白井寛之

1. はじめに

現在、生活スタイルの変化や、より低価格で便利な商品の流入などにより、伝統産業の市場は縮小し、多くの伝統産業が衰退している。

鳥取県の伝統工芸品である倉吉緋は、倉吉市で江戸時代末期から製造されている緋であり、複雑な絵柄が美しいことから、倉吉緋に加え、弓浜緋、広瀬緋は山陰の三緋緋と呼ばれている。倉吉緋の産業も、明治時代をピークに衰退している。

この伝統工芸品の倉吉緋について調査し、分析を通して伝統産業の再活性化のための課題を明らかにする。

2. 調査課題

時代の変化とともに衰退していったものの、現在まで受け継がれている伝統工芸品の倉吉緋について、調査課題を次のように設定した。

倉吉緋について、その歴史から現在までの経緯、産業の構造、緋を継承している団体の組織体制、緋に携わる人々の価値観などを調査する。

それらの調査結果を踏まえ、倉吉緋の強み・弱み・機会・脅威を明らかにする。

3. 調査方法

調査にあたっては、まずウェブなど対象に関する二次データを参照した。そのうえで、倉吉緋を販売しているふるさと工芸館に二度にわたってインタビューしに伺った。(2017.5/1 9:00~11:00,12/7 14:30~16:00)インタビューにご協力いただいた方は、倉吉緋保存会の会員である。1回目と2回目では違う方にお話を伺った。また、緋の保存や展示、織物実習などを行っている鳥取短期大学緋美術館・緋研究室の館長である吉田公之助先生にもインタビューしに伺った。(2017.11/9 14:00~16:30)

4. 調査結果

(1)倉吉緋の歴史

起源

明治33年発行の「鳥取勸業沿革」によると、文政年間(1816~29)に稲島大助という人物が米子の車尾で織られていた車尾緋を模倣して花鳥山水を織り始め、その後、永井某が意匠に創意工夫を加え倉吉緋の名声を高めたとされている。

当時の倉吉地方の各家庭では、自宅で使う木綿の衣服や布団生地は、農家の女性の副職として手で織られており、そのため職人というものはいなかった。

全盛期

明治時代には、主に県外へ出荷するために西日本を中心に全国へ売られるようになった。最盛期は明治30年代で、年間約38,000反織られていた。国内外の博覧会にも出品され、高い評価を得て数多くの賞を受賞した。

衰退

大正時代に入ると、工業生産が盛んになり、緋の代替品となる安価な衣類が多く出回るようになり、絹を素材に使った緋の登場や、緋の高度な織技術を機械化できないこともあり衰退していった。しかし戦後、染織家である吉田たすく氏がそれまで廃れていた倉吉緋を研究し、試織を繰り返し復元させた。



写真1: 倉吉緋

(2)現在の倉吉緋

現在では、倉吉緋保存会というグループと鳥取短期大学にある緋研究室が主体となって、倉吉緋の技術を継承する活動を行っている。また、倉吉市にある「伯耆しあわせの郷」という施設では、県無形文化財保持者である福井貞子氏が講師となって織物教室を行っている。倉吉緋の組織体制は、図1のとおりである。倉吉緋保存会については(3)に、緋研究室については(4)に記した。

緋を作る工程の中の「括り」は、現在鳥取弓浜中村括りの中村武志氏が担当しており、緋糸の「染め」の工程は、鳥根県安来市の染織作家青戸柚美江さんのご子息の秀則氏に委託をしている。

括りや染めは複雑な作業のため、昔は職人がやっていた。現在は基本的に上記の専門の人に作業を委託する。しかしこのような仕事に携わる人材が不足してきているため、自分達でこの工程を行うこともある。

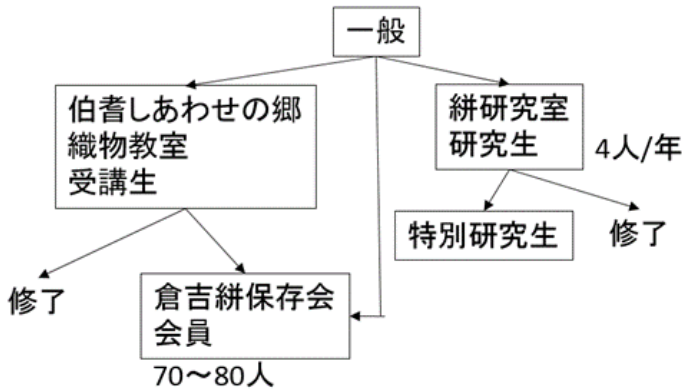


図1: 倉吉緋の組織体制

倉吉緋の特長

- ・絵柄が非常に美しい
- 他の地域に比べて緋足(緋のズレ)が極端に少なく、下絵がほぼそのままに織られている。
- ・単価が低い
- 職人ではなく一般人が織っており、人件費等もほとんどのせていない。

倉吉市では、レンタルの着物で白壁土蔵群の街並みを眺めながら歩けるという催しを行っている。また、緋が展示会や市のイベントなどで使われることもある。最近では、明治大学の博物館で特別展「鳥取の工芸文化 手仕事の近世、近代、そして現代」が開催され(10/19~12/17)、そこで倉吉緋も取り上げられた。

(3)倉吉緋保存会

3-1. 歴史

倉吉緋保存会は、吉田たすくと福井貞子によって約50年前に立ち上げられた。地元の主婦が活動の中心となっている。当初は倉吉北高校で緋教室を開いていたが、保存会という体制になってからは、倉吉白壁土蔵群の近くにあるふるさと工芸館を拠点に販売活動を行っている。

3-2. 組織体制

緋を自分達の手で織り、それを自分達で消費したり、販売したりしている。織り方は、保存会内では指導しておらず、倉吉にある「伯耆しあわせの郷」の織物教室などで学んでいる。

人数: 70~80人(会を立ち上げてからほとんど推移していない)

年齢層: 40~90代 主に60代

会員のうち20人ほどが、緋の販売に携わっている。保存会で作られた緋はふるさと工芸館内で販売されている。工芸館は、市の減免の対象となっており、人件費もほぼボランティアのためほとんどかからず、公的資金によって非常に低コストで成り立っている。

3-3. 倉吉緋の市場規模

商品の価格は、しおりやストラップなどの小物は500~1000円、タペストリーや巾着袋など少し大きいものは数千円、衣類などは数万円で販売されている。値段設定は自分達で行っている。高いと感じない、県外からの顧客にも気軽に購入してもらえる価格に抑えている。主な顧客は観光客で、稀に大口顧客が来ることもある。テレビで倉吉緋が取り上げられたり、イベントで使う時などに注文が大量に来ることがある。しかし、年間の売り上げは数百万円もいかないほどである。



写真2: ふるさと工芸館



写真3: ふるさと工芸館の館内

3-4. 保存会の価値観

「産業」で利益などに縛られたくない、「趣味」として自分達がしたいようにしたいという価値観のもと、保存会では産業ではなく趣味の延長として緋を生産している。

利益を出すためではなく、倉吉緋の存在を知ってもらうために活動している。商品は、注文が大量に来る時以外は自分達が作りたいものを作っている。しかし商品として出すときには、縦糸が緩んでいるなど品質に問題があるものは作り直したり商品として出さなかったり、商品のバラエティを豊富にするなどこだわっている。県外に商品を卸すことはしておらず、ほとんどのものが工芸館でしか購入できない。

(4)鳥取短期大学 緋研究室・緋美術館

4-1. 歴史

鳥取短期大学のキャンパス内に、緋研究室・緋美術館という施設がある。倉吉緋の技術保存と後継者育成を目的に、昭和63年に1階の緋研究室工房が開設された。2階の緋美術館展示室は、緋研究室の10周年を期に倉吉緋の保存と集中点字を目的として、平成10年4月に開館した。そこでは、明治大正期の倉吉緋の作品などを展示している。

4-2. 組織体制

研究室では、織物実習・講義・学外見学など幅広く研修を行っており、受講生も毎年募集している。

人数: 年平均4人 前年に入った人が残りつつ新しい新しい人も入るのが理想

年齢層: 20~70代 趣味で織るために習うという人がほとんど

修了生: 約120人 希望者は特別研究生としてより高度な緋の織り方を習う特別研究生として6~7年習っている人もいる

ふるさと工芸館の方によると修了して保存会に入会する人は現在ではほとんどいないため、研究室の修了生の人数と保存会の会員数は関係がないそうである。

4-3. 緋研究室の価値観

倉吉緋は、人々の趣味として織られているという壁を超えられないため、産業として発展するのは困難であると吉田先生は仰る。ニーズに合わせて作ることはあまりなく、新しいモノを作ることを強要することもできない。また、大量の注文が来た時に生産が追い付かない、着物以外のニーズを発見できていない、外部への発信が弱く認知度が低いなどの課題もあるという。

一方で、新しいモノを作るために着物以外の応用の研究も行われている。現在は、ショールやタペストリーなどがあるが、地下足袋を作ろうという人もいる。認知度が低いことに関しては、チラシや新聞広告等で緋研究室の受講生を募集したり、緋美術館を観光地の一つとしてPRしたりしていくことが今後の課題であるという。

「全く新しいものを作るための冒険をするべきである。生産販売は次第に衰退していく恐れがあるが、緋研究室の特別研究生など後継者もいるため、今後何十年後かに消滅してしまう可能性は低い」というのが吉田先生の見解である。



写真4: 緋研究室・美術館



写真5: 緋研究室内

5. 考察

以上の調査結果を踏まえて、倉吉緋についてSWOT分析を行った。資源要因である強み(Strengths)と弱み(Weaknesses)、環境要因である機会(Opportunities)と脅威(Threats)の4つにまとめ、それぞれについて考察をした。

資源要因	<p>強み: 倉吉緋保存会と鳥取短期大学緋研究室というバックアップの体制が整っている 職人ではなく一般人が緋を織っている</p> <p>弱み: 緋研究室と倉吉緋保存会との関係が薄い 新しいものを作りだそうという気持ちが弱い 外部への発信が弱く認知度が低い</p>
環境要因	<p>機会: 市のイベントなどで使われる 展示会やテレビ番組などで取り上げられる 観光PRなど</p> <p>脅威: 括り、染めを専門に行う人材の不足 消費者の趣向の変化 競合(ユニクロなど安価な衣類)</p>

強みを伸ばすには

- ・保存会・緋研究室の後継者の確保
- ・より多くの一般人に倉吉緋を認知してもらうための活動

機会を捉えるには

- ・積極的なイベント等への参加

弱みを克服するには

- ・緋研究室で学んだ後に保存会に入会するという流れの構築
- ・全く新しい商品を生み出すための取り組み
- ・チラシや新聞広告等による緋研究室の受講生募集
- ・緋美術館を観光地の一つとしてPR

脅威を克服するには

- ・括りや染めを専門に行う人材の発見、新しい人材の育成
- ・顧客のニーズに合った商品の作成、販売

6. おわりに

以上、本稿では、倉吉緋の産業の構造や緋に携わる人達の価値観などを捉えることを目的に、倉吉緋保存会や緋研究室にインタビュー調査しに伺った。そして、調査内容を基に倉吉緋の強み・弱み・機会・脅威を明らかにした。

その結果得られた知見とは、(1)倉吉緋保存会と緋研究室が主に倉吉緋の維持に貢献しており、緋は昔から職人ではなく一般人が織っていること、(2)保存会と緋研究室との関係が希薄であること、(3)緋が市のイベントで使われたりテレビや展示会で取り上げられること、(4)括りや染めを専門に行う人材が不足していること、現代の消費者の趣向も変化していることである。

倉吉緋の伝統を将来まで維持していくためには、保存会と緋研究室を維持していくとともに相互関係を構築すること、イベントへの参加やPRを積極的に行っていくこと、括りや染めを専門に行う人材を確保することが重要である。

[謝辞]

本論文を作成するにあたり、インタビューに協力してくださったふるさと工芸館の方々、鳥取短期大学緋美術館館長の吉田公之助先生へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。謝辞にかえさせていただきます。

参考文献

- home | 倉吉緋の歴史 - Wix.com (kurayoshikasuri.wixsite.com/home/about)
- home | 緋ができるまで - Wix.com (kurayoshikasuri.wixsite.com/home/about3)
- 織物教室 | 伯耆(ほうき)しあわせの郷 (shiwawasenosato.jp/kyoushitsu_detail.php?id=89)
- 緋研究室・緋美術館パンフレット